

聖書 エレミヤ書28章17節、ヨハネ福音書8章37〜47節

本日のヨハネ福音書の個所は8章37節から47節ですが、31節から何度も「アブラハムの子孫」あるいは「アブラハムの子」という言葉が出てきます。本日の個所を理解するために31節から見ていきます。イエスはご自分の話を信じたユダヤ人たちに『わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする』（31〜32節）とおっしゃったのに対して、イエスの言葉を聞いて信じていたユダヤ人たちは『わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません』（33節）と反論しています。なぜ彼らユダヤ人たちは反論したのか。それは、イエスの言葉に真理があることを信じ始めていたユダヤ人たちが、そのイエスの真理である言葉によって自由になると言われたからです。ユダヤ人たちが自由になると言われたことで、イエスの言葉を信じる前の自分たちが何らかの奴隷状態にあるとイエスに指摘されたことと受け止めてしまったので、『わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません』と反論したのでした。自分たちユダヤ人は確かに、今はローマ帝国の属国になっていて、不自由さをかこつてはいるが、奴隷状態ではない、ということと言いたかったのかもしれない。それに対してイエスは34節で『はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である』と応えて、少し煙に巻くような言い方をしています。誰でも罪人であることに間違いはないのです。けれども、イエスは37節以下で、本当の意味で、まだイエスの言葉を完全には信じていないので、あなたたちはわたしを殺そうとしている、と言います。ここでのユダヤ人がどういう人物たちであるかの詳細なことはわかりませんが、自分たちがイスラエルの信仰の父であるアブラハムの子孫だという自意識を強く持った人たちです。

1

アブラハムは歴史上の実在の人物で、ある日神の声を聞きました。『あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし あなたを祝福し、あなたの名を高める』（創世記12章1〜2節）。アブラハムはその声に聞き従って、行き先を知らないうちまで出発しました。ここに信仰の原点があるのです。信仰は到達点を知らないままでも、神が必ず自分を導いてくださるといふ、神に対する信頼を抱いて聞き従っていくのですが、ここでのユダヤ人たちは自分たちが信仰の祖であるアブラハムの子孫であることを鼻にかけて自己満足している人たちだったのです。だから、自分たちが何らかの奴隷状態になっていて自発的な信仰がないかのようにイエスに言われたと早とちりしたのでした。

アブラハムはカナンの地へ導かれるままに聞き従っただけでなく、神から念願の子どもが与えられるという言葉を最初心底から信じなかったのですが、その試練も乗り越えたところで、最大の信仰的試練を受けました。それは最愛の息子イサクを神への犠牲の捧げ物としてささげなさいという命令にも従ったのです。けれども、この命令は、アブラハムがまさにイサクを殺そうとした瞬間に神によって中止させられたのでした（創世記22章）。アブラハムが目を凝らして周りを見ると、犠牲の雄羊がいたので。このように、アブラハムは神の声に聞き従うことにおいて徹底的だったのです。

さて、ユダヤ人たちが『わたしの父はアブラハムです』と言うと、イエスは次のように答えられています。39節『アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。ところが、今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった』（39〜40節）。

さらにイエスは言います。『あなたたちは自分の父と同じ業をしている』（41節）。この言葉に

対して、ユダヤ人は『わたしたちは姦淫によって生まれたものではありません』（41節）と言い返しています。これはアブラハムがサラの女奴隷によってイシュマエルを生んだことを指していると誤解したのでしょう。8章の冒頭で姦淫の女性を罪に定めないと言ったイエスの言葉が脳裏にこびりついていたのかもしれませんが。ユダヤ人たちは自分たちがアブラハムの子孫だという言葉に對してイエスがなんら動じないのを見て、今度は自分たちが神の子であるということを主張し始めるのです。これに對して、イエスは『神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここに居るからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣わしになったのである』（42節）と、イエス自身が神のもとから来た存在であることを強く言います。神の子であるイエスを受け入れることに躊躇しているのは、イエスが神のもとから来た救い主であることにいまだ気づいていない彼らの頑なな思いがイエスを正當に見ることを妨げているのです。

イエスの発言に對して、ここに登場するユダヤ人たちの反応が食い違っています。自分たちが信仰の父祖であるアブラハムの子孫であるという血統からみて自分たちの優位性を主張しているからです。けれども、アブラハムの子孫だというだけで、自分の信仰が立派なものだというのであるならば、自分の親は熱心な信仰者だったから今の自分に信仰心が大きくなってなくても、自分は神の恵みに十分に値する存在だと主張しているようなものです。確かに、信仰的な家庭環境は大切ですが、それを理由に神の恵みに自分が預かっていると考えるのは、乱暴な論理構成です。

私たちの教会の創設者である中山真多郎牧師は、賀川豊彦牧師の影響を受けて東京の下町伝道を始めたのが源流ですが、日本のキリスト教の歴史を見るならば、ヨーロッパで宗教改革が起こったことで、それまでのローマカトリック教会がプロテスタント教会のプロテスタントを受けて、カウンター宗教改革を行う過程で、海外に布教を行う方向性に向いたことで、フランススコ・ザビエルが日本の鹿児島に来たのが室町時代の1549年です。その2年後には、日本語も十分に話せないなかで彼は500人以上に洗礼を授けたのです。ところが時の権力者である秀吉はキリシタン禁令を出して、1597年には長崎で宣教師やカトリック信者ら26人を殺害したのです。けれども、このキリシタン禁令によって、皮肉なことにスペインやポルトガルなどのヨーロッパ諸国の植民に日本がなる危険性がなくなったともいえるわけです。ヨーロッパ諸国によるアジアの植民地政策ではキリスト教が精神的な地ならしの役目を果たした事例が多くあって、このキリスト教の布教が植民地化を推進させたということが歴史的事実としては言えるわけです。日本がキリシタン禁令をしたことで、植民地化されなかったわけですが、それは逆に言えば第二次世界大戦で、日本がアジアの植民地の解放を大義名分に掲げてイギリスやアメリカと戦争をするようになったともいえるわけです。歴史に「もしも」はありませんが、現在の日本でキリスト教は少数派ですが、もし、ザビエルの布教がそのままあったならば、日本は植民地化されていたかもしれませんし、植民地化されたならば、江戸幕府も存在しなかったかもしれませんし、明治維新もなかったかもしれません。いずれにしても、日本におけるキリスト教の様子は現在と随分違っていたことでしょう。

本日の聖書箇所に出てくるアブラハムの業と言うのは、彼が神の声に聞き従ったことを指しています。けれども、アブラハムも神の声に聞き従った信仰者ですが、イエスは十字架への道を神の意志として受け止めて歩んだお方です。このイエスが神の意志としての真理を体現されているのですから、私たちはイエスの十字架への道を真理へ至る道として歩いていくしかないのです。それは『神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである』（ヨハネ3章16節）という御言葉が成就するためであったからです。